
理由

浅川 心

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由

【Nコード】

N3429J

【作者名】

浅川 心

【あらすじ】

少年の小さな日常の事件の中から、男性の心理を描いています。子供でも大人でも、男性が持つ脳のシステムは変わらないもの。

説明できない、言葉に出来ない、目の前のものに夢中になる、男だけに分かる世界・・・

そんな男世界を、少年の目と成人した男の目で描写したショートシヨートです。

（前書き）

心理カウンセラーが書く、心理描写をメインにしたストーリーです。
男の子の心理は、大きくなってあまり変わらないもののなのです。

久我美紀ちゃんはいつもミニスカートだ。そして、パンツをいつも見せてるのに、

男子が来ると”見ないでよっ”と、隠す。

見たくもないし、見てもないのに、何でいつも怒ってるのかわからない。

トシが自転車に変速ギアを付けてもらったというので、今日はセミ公園に自転車で集まることになった。

坂本とヤマと俺とトシの4人で、セミ公園のいぼいぼのコンクリートの山にまたチャレンジするんだと思う。

俺が公園に着いたら、入り口には坂本しかいなかった。そのまま坂本の横を通り抜けて、

いぼいぼの山に自転車を漕いでいったら、うしろから坂本も着いてきた。

二人でしばらく、いぼいぼの山の横に自転車を置いて、棒のぼりをしていたら、

久我美紀ちゃんがひとりで歩いて来た。

坂本が、棒の上の足をかけるところまで行つて、久我美紀ちゃんに向かつて、何かを投げつけた。

でも久我美紀ちゃんは気づかないで歩いていってしまった。

”それ、なに？”と聞くと、坂本が笑つて俺にもそれを投げってきた。何かの粒みただけだ、なんだかわかんなかった。”やめろよ”

と、俺は言っ、棒を降りた。

降りたところで、トシが来て、すぐにヤマも来た。

4人で自転車に乗り、いばいぼの山に登り始めたけれど、やっぱり難しい。

俺らは作戦を立てて、4人いっせいのせで、登ることにした。誰かが滑り落ちてきたら、

下のやつが自転車の前輪で支える作戦だ。

俺はトシと二人で組んだけれど、トシは登り始めると、横のヤマの方へよろけて進行方向が変わってしまった。

ヤマは力がないので、身体のでかいトシを支えられず、二人とも絡まるようにして、

いばいぼの途中で引っかかりたりしながら、落ちていった。

俺は、何回目かで3つ目の石のところまで前輪はあがったけれど、5つつめを超えなければ頂上にはいけないので、やっぱり無理だった。

自転車が滑り落ちたので、最後は飛び降りた。

何回も何回も、ただ登る。よしとか、すげーとか、いいながら、ひたすら。

いばいぼの山登りをすると、お母さんには叱られる。

転び方を間違うと自転車が傷だらけになるし、洋服もスライディングしたみたいになるから。

でも、どうしても面白いのでやめられない。特に2週間くらい前に同じ組の村上が

頂上まで登りきったので、クラスの男子の中では今最大ブームなのだ。

何回か、同じ事を繰り返していたら、急にトシが帰ると言い出した。みんな”え？”って顔をしたけれど、何も言わずに、トシは新しい自転車でダッシュして行ってしまった。

仕方がないので、3人でチャレンジ続けた。

作戦なんかいつの間になくなった。そして、数十分かけて、俺が3つ目の石を登りきったら、

どんどんあとの二人もエスカレートしてきた。坂本は俺の自転車に、自分の自転車をぶつけて、

邪魔をしてくるようになった。こいつはそういうところが、汚い。でも、どうしても今日は4つ目の石まで行きたくて、俺は無視していた。

”ズザッ！ガシャーー！！・・・ドンッ！！！”

すごい音がして、左後ろにいた坂本が倒れた。いつもしないような、すごい変な音がした。

見ると、坂本が自転車の下にいた。そして、動かなかった。

ヤマと俺は目を合わせて、”やばい？”と確認しあった。

”坂本？”・・・声を出したのは、ヤマだった。

坂本は返事をしなかった。それから、そのとき自転車と坂本の身体は超合金みたいに、一体化していた。

腕がある位置が、よくわからないけど、変だったのだけ、覚えてる。

”マジ？死んじやったんじゃない？やべー、どーしよー？？？”と、ヤマが半泣きになった。

でも、その瞬間、坂本が、”ヒュー…”と変な声を出した。泣いてるみたいな顔になった。

”死んでねーよ、誰か大人呼んでこよーぜっ”興奮して言ったのは、俺だったと思うけれど、あまりよく覚えてない。

少しすると、大人が何人かやってきて、救急車を呼んだ。お父さんくらいのスーツの大人が、

”どうしたんだ？”と聞いたけど、”わからない”しかいえなかった。

”お前ら、一緒にいたんだろうが？”と言われたけど、俺にだって転んだことしかわかんない、説明なんか出来ない。

救急車で坂本が運ばれて行って、俺らは自転車で家に帰った。

リビングでは、お母さんが半泣きで超怒ってた。何であることを、もう知ってるのか、わかんなかった。

”なんで何回言っても、同じことやるのよ？ほらみなさいよ。あんな馬鹿なの？どうして？もう、意味わかんない。なんで何回もやる

のか、いいなさいよ。坂本君は、腕と足の骨折だつてよ？よかったほうよ。あれがもし打ち所が悪かったら、大変なことになってたのよ？どうするの、あんたそしたら？”

怒られてるのが、説明されてるのが、よくわかんない。それに、そんなに色々言われたつて、

なんていつていいかわかんないから、黙ってるしかなかった。

”なんで黙ってるのよ？なにがあつたのよ？”

”知らない”

”知らないわけないでしょう？久我美紀ちゃんが、あんたトシ君と遊んでたつて言つてたけど、トシ君はいなかったじゃない？どこ行つちやつたの？あの子がなんかやつたの？”

・・・久我美紀ちゃんが何を見てたのか知らないけれど、どうしてそういう話になるのか、
余計わからなくなつて、俺は結局”知らない””見てなかった”以外はほとんど言えなかった。

何であんな何十年も前の、小学生の時のことを急に夢で見たのかわからない。朝起きて、自分でも驚いた。

坂本はあのあと半年くらい、ギプスをしていた。ヤマとは今でもたまに飲みに行くけれど、

あの話はあまり出てこない。出さないのかも知れない。

トシは中学で転校していった。今はどうしてるのかまったく知らないが、あのころトシの家は

なんだか家庭の事情が複雑で素行も荒れていて、うちの母親はあまりトシと遊ぶのを、好意的に取ってなかった。

朝ごはんのとき、妻が機嫌が悪かった。

怒りながらしゃべる口調が、夢で見たあの日の母とあまりに似ていて、思わず笑ってしまった。

それをみた妻は、俺が小馬鹿にしていると思ったらしい。

” どうしてこんな時に、笑えるのよ？意味わかんない。どうして空気が読めないの？馬鹿じゃないの？それって会社でもそうなの？会社で真剣な話してるときに、そうやってへらへらしたら、大変じゃないの？・・・”

……今日の夢が正夢とまでは行かないけれど、かなりそれに近いのは間違いないようだ。そ

れから、今まであまり考えたことなかったけど、男は、潜在的に自分の母親に似てる人を娶るっていうの、

本当かもしれない。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3429j/>

理由

2010年12月29日21時52分発行